

なしたりけん。和訓栞に、やぐらは榎をよめり。彌藏の義、重ね造りたるをいふ。ともいへり。

○彈藥藏跡

其の遺跡詳かならずといへども、天守臺の傍にありたるなるべし。聞見雜錄に、金澤の城天守に雷落る事、關原陣の三年目十月晦日夜、天守に雷落ち火事出来に付、玉泉院様御同道にて御城外へ御出の處に、天守の鐵炮の藥に火付き、梁・桁・柱等不殘飛び、一つの木御額にあたるなり。と見ゆ、三壺記には、天守へ雷落ち本丸御新宅等延焼。此の時如何して入りけん、鐵炮の藥藏へ火の粉入り、どうくんと鳴る。半時ばかり町中も闇と成り、其の後一同に百千の雷の如く鳴り渡り、藥の勢にてはね付けられ死する者夥敷、前田美作屋敷の外なる西方寺の屋根へ、長刀持ちながらはね付けられ死する者もあり云々。とあり。加藤系譜に云ふ。慶長十年十一月晦日、金澤御城雷火にて焼亡。此時宗兵衛父子火を防ぎ居たるに、鹽硝藏へ火移り、鹽硝散亂し、父子共火傷致し、宗兵衛は其れが爲め、翌十一年正月十二日死す。とあり。按ずるに、三州志にも、此の時鹿毛文内を

瑞龍公より使として遣さるゝに焼死す。祿二千石、子孫今猶富山にあり。といへり。又一書に、瑞龍公の時金澤の火災に、改田半右衛門火を防ぎ焼死とあるも此の時ならん。祿四千石、今改田二家の祖。といへり。右藩士の人々焼死せしも、彈藥藏に火入りたる故なるべし。加藤氏所藏の利長卿親簡寫。

書狀披見候處、加藤宗兵衛相果候由、不便候。然ば彼知行三千五百石の内三千石大炊に遺可申、殘る五百石と、今迄大炊取申四百石、合九百石分大炊弟にとらせ可申、馬廻に入と存候。大炊と一所に役等をも可仕候。將又大炊弟前々より取來候知行三百石は、此方に請取、則代官可申付候。右之趣念を入可被申聞候。とし。

正月十九日

利長

横山大膳殿

右宗兵衛位牌等にも、慶長十一年正月十二日と記載したれば、雷火は十年乙巳なる事著明也と云ふ。按ずるに、三壺記に、慶長十年十一月晦日宇賀祭の宵の事也と見ゆたる故、彼の子孫十一年正月十二日を死亡の日と定めたるものなら

んか。三州志來因概覽附録の自註に、按ずるに、此の火災年譜及び年代鑑には、十一年丙午とす。國事昌披問答・金澤火事録・三壺記には、十年乙巳とす。高畠古典本には、十年十月晦日とす。菅家見聞集・系譜には、七年壬寅とす。古來說々紛々たるを以て、或人之を奥村丹波守へ問ひしに、七年壬寅と慥に答へらると云ふ事もあり。と記載し、三州志には、青地禮幹撰の系譜に據つて七年十一月晦日とすれど、寛永系圖傳等に、七年十月晦日とあり。是正説なれば禮幹の説も非也。又關屋政春の古兵談に云ふ。金澤河原町より火出で、御城焼けたる時、或人利常卿の使命を蒙り、鐵炮の藥藏如何と走り行き、薪丸より車橋への坂を下るに、加藤圖書・津田勘兵衛其の外四・五人同道して、扱も殘多き事哉と云ひて來る。彼御使の者圖書に對して御藥藏はと云ふ。兩人の曰く、隨防防ぎたれども不及是非と云ふ。御使の者少しも早く言上すべしと走り歸り、其由言上す。御前に在合ふ人々も興をさます處に、又或人走り來て、御鐵炮の藥藏は堅固の旨言上す。最前の人、其方はいつの事を申すぞ、唯今津田勘兵衛・加藤圖書御藥藏は既に火入りたりといへりと云ふ。後の人

曰く、勘兵衛・圖書は御藥藏の事は知るまじ。我等は只今まで御藥藏に居て直に是へ來るゆゑ少しも氣遣被成間敷と云ひ、兩人爭論に成る。然れども津田・加藤は堂形の米藏に居て、右藏に火懸りたるに依りて、車橋を渡り御城へ行くとて、御使に行き合ひ、間違へたるに極る。其後彼人御前終に不宜と。則其人の語りけり。とあり。按ずるに、右は寛永八年四月十四日、金澤出火城中延焼の時也。同十四年三月の火事定書に、堂形之御藏並に御鐵炮藥藏御馬廻一組替々。とあり。是も即ち同藏にて、其ヶ所は慶長七年に炎焼せし本丸天守臺の傍なる藏と同地なるか、再造の時地を移轉せられしか詳かならず。さて城内の彈藥藏は後に廢せられ、石川郡大桑村の地内に更に建築せられたるならん。改作所舊記に、明曆四年五月晦日の、大桑村百姓の書付に、拾貳歩三尺畠方大桑村高之内、右はえんしやう御藏新屋敷惣堀之たまり水、畠へかゝり申所、三拾間の間は貳尺五寸通り土居御つかせ被成に付、右步數程同野の内柴草を替地に被相渡。といふ事を載せたり。右藏は廢藩の際まで存在せし、長坂村の邊りなる鹽硝藏是なり。長坂村の地邊はそのかみ